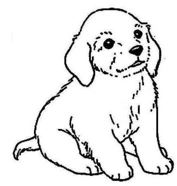
対面リーディング通信



2016年10月

2016年１０月1日 発行　　第１７２号（隔月刊）

「対面リーディングの集い」のご案内

日時：11月17日（木曜日）　13時～16時
場所：情報文化センター４階　第１会議室
講師：岡本　昇（おかもと　のぼる）

今年も集いの時期がやってきました。皆さまのご参加をお待ちしています。

例年同様、講演と交流会の２部構成での開催で、第１部の講演は当センター職員の岡本より、「視覚障害者理解」を中心に、視覚に障害を持つ方の読書環境などについてお伝えする予定です。

第２部の交流会では、普段の対面に関する意見交換ができればと思っています。皆さまのご参加をお待ちしています。

参加予定の方は職員までお知らせ下さい。また、メールでの受付も行っています。
メールアドレスは　book@iccb.jp　です。

なお、ご連絡がなかったかたには、後日お電話での出欠確認をさせていただきます。

今月号の主な内容

対面リーディングの集いのご案内			1
対面リーディング難所物語	最近の『群像』の書評欄、随分と充実しています！ 2	二村　晃	2
私のふるさと	能勢電沿線	稲継　基子	3
誌上勉強会	正確に読むとは　－ 変化していく日本語 －	木村　謹治	4
寄り道・回り道	守破離　堂島店	木村　謹治	8
情報発信	手引きによる誘導　その2	福田　直樹	9
お知らせ			１０

８１.最近の『群像』の書評欄、随分と充実しています！（その２）

二村（ふたむら）　晃（あきら）

前号に続き、群像７月号の書評欄をご紹介しましょう。しっかりした注釈が見事です。

「キョウカイ」を切り裂く言葉‥キョウカイは、物事の境目。「トミオカコウイチロウ‥「トミオカ」は、フジサンの「富」と、オカヤマケンの「岡」。「コウイチロウ」は、「コウフクの「幸」と、漢数字の「一」と、「タロウ」の「郎」。‥富岡幸一郎が評者。

「イイナオユキ著‥イイは、「イセの「伊」とイドの「井」。ナオユキは、チョッカクの「直」と、コウドウの「行」‥伊井直行著。『尻尾と心臓』　講談社刊　1800円。

音訳者は「シッポ」と軽く読まれましたが、漢字の「尻尾」だと教えてほしいですね。

『尻尾と心臓』という奇妙な表題の本書は、正に会社員とは何か？という謎に正面から挑んだ野心的小説であると、評者の言葉です。描かれる会社は、九州の食品関連の商社で「カキヤ」忠実堂。カキヤは果物の「柿」と「谷」。その関東の子会社は、カキヤというカタカナ名の会社で、本書の舞台です。主人公の乾紀実彦は、新しい事業開発の目玉となる営業補助システムの開発のために親会社から転籍します。落下傘のように舞い降りた乾は周囲の反撥と戦いながら、画期的な新製品の開発を進めます。

彼の相方となるのは、笹島彩夏という外資系コンサルタント出身のビジネスウーマン。作品は乾の視点と、キャリアを積んだ彩夏の視点との両面から構成されています。二つの異なった領域の間の相克、境界人としての不安と苛立ちが、全編に溢れています。彩夏にしても、コンサルタントの眼差（まなざ）しと、現役社員の自分とに分裂を感じているのです。

「デモーニッシュ‥悪魔のような‥ともいえる「レンカン」‥ワをつなげる‥連環は、通常の企業が行なう敵対的買収活動などに露骨に具現されている」と、評者の所感です。

デモーニッシュという単語にさりげなく日本語訳を並べ、連環の熟語に、注釈を加えた音訳者の呼吸は鮮かなものです。感服しました。

「作家が描き出すのは男であり、女であり、父や母や、家族の一員であるとしての自分の領域と、法人というもう一人の自己の領域を往き来する「キョウカイジ」‥境目に居る人‥境界児としての「ソウボウ」‥姿、形‥相貌に他ならない」と、評者は言っています。

『会社員とは何者か？』の中で、興味深かったのは、カフカの『変身』のグレーゴルを、会社員のまま自然人ではなく、法人として捉えなおしていることです。家庭では会社員、法人は異物であり、その異物性が甲虫として表現されているというのです。

「本書は作家の初期作以来の日常の自明なるものを異化、世界の実相を切り裂いて見せる尖鋭な文学の方法論が、会社や社員たちの詳細な描写や具体的な設定によって「シンカ」‥「深い」深化させられ実に読みごたえのある作品となっている」と評者、絶賛です。

注釈も見事で、カフカの甲虫を持ち出した新解釈にも魅了されました。　〈つづく〉

能勢電（のせでん）沿線

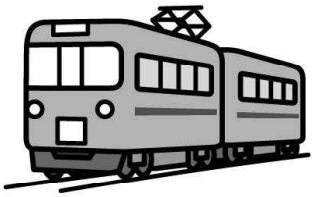
メディア製作センター　稲継（いなつぎ）　基子（もとこ）

今回は私が３歳の時から住んでいる川西市をご紹介します。

川西市は、東に池田市、西に宝塚市、南に伊丹市、北は猪名川町に囲まれている縦長の街です。

阪急「川西能勢口駅」から能勢電鉄が猪名川（いながわ）沿いに、北部の妙見山（みょうけんさん）、北西部の日生中央（にっせいちゅうおう）方面へ伸びています。

沿線は一山（ひとやま）丸ごと、一戸建てのニュータウンとして分譲されているところが多く、湯山台（ゆやまだい）、清和台（せいわだい）、ときわ台、大和団地（だいわだんち）、光風台（こうふうだい）、多田グリーンハイツ、日生中央などがあります。



能勢電鉄は明治４１年に開通しました。駅の名前も絹延橋（きぬのべばし）・滝山（たきやま）・鶯の森（うぐいすのもり）・鼓滝（つづみがたき）・多田（ただ）・平野（ひらの）・一の鳥居（いちのとりい）・畦野（うねの）・山下（やました）・笹部（ささべ）・・・と妙見山の登山口にあたる妙見口まで風流な名前の駅が続いています。

鼓滝は西行法師が訪れたという伝説があります。「はるばると鼓が滝にきてみれば　岸辺に咲くや白百合の花」と西行が詠むと、民家の老夫婦と子供が「音に聞く鼓が滝をうちみれば　川辺に咲くや白百合の花」に変えてはどうかとアドバイス。夢から覚めると、和歌の神の住吉大明神のほこらの前だったとか。

多田は清和源氏発祥の地。多田神社には、国の重要文化財の建物、奥には源満仲（みつなか）公・頼光（よりみつ）公の廟所（びょうしょ）があります。４月には「源氏まつり」が開催され、多田神社から多田駅までの桜の街道を馬に乗った鎧（よろい）姿の源氏ゆかりの武者が練り歩きます。

平野は炭酸水が湧いており、かつて「平野水（ひらのすい）」という名前で販売、いまの「三ツ矢サイダー」の元祖になったとか。

妙見口から妙見山までは、気持ちのいいハイキングコースです。ケーブルやリフトもありますので、体力にあわせてコースを選ぶことができます。

猪名川の上流の一庫（ひとくら）ダム（知明湖（ちみょうこ））の周りもおすすめ。黒川周辺は里山の残る地域で、菊のような断面の美しい菊炭（きくずみ）（池田炭（いけだずみ））の産地です。秋にはダリア園が開園されます。

また、大江山の鬼退治に参加したメンバーにゆかりのある満願寺（まんがんじ）、小童寺（しょうどうじ）、頼光寺（らいこうじ）もあり、特に頼光寺は紫陽花（あじさい）が綺麗です。

木村（きむら） 謹治（きんじ）

対面リーディングの実際 １８

― 正確に読むとは　変化していく日本語 ―

最近は新聞以外でも小説やルポルタージュなどで若者言葉を見る機会が増えてきました。

ひらがなやカタカナで書かれているものが多いので読めないことはないのですが、意味もアクセントも分かりません。

例えば「じゃぁね！フロリダ」って何と思いますか？　人の名前？　それともアメリカの地名？

実は「風呂に入るから（会話から）離脱する」だそうで。そんなことも略語にするんですね。最近の女子高生など若者は、ラインや Twitter などの SNS で略語が飛びかってるのかもしれませんね。

意味がわかりましたが、どう発音するのでしょうね。書き言葉なので特に発音は気にしなくてもいいのでしょうか？

他にも「やったーめいちゃんあざお！」これも「あざお」さんからメールではなく「ありがとうございます」を略して、『あざお』と表現するのが最近流行っています。かつては「あざます」「あざーす」なんてのが流行り言葉になっていたそうですが、これからは『あざお』が定番として仲間入りするかもしれませんね。

「ゆめかわ友達欲しいなぁ～～～ゆめかわな格好して街中めっちゃ歩き回りたい～～～～！！！！！！！！」は「夢のように可愛い」を略して『ゆめかわ』と言う言葉で表現しています。

女の子がよく使っています。ファッションやオシャレに関わる部分でよく利用されている言葉になっているようです。

かつて「おしゃかわ」という言葉が使われましたが、使う機会が少なくなりました。こちらの『ゆめかわ』は定着している感じで、よく使われていますね。

こんな風に、おじさんやおばさんには通じない言葉が普通のように飛び交っています。

どのようないきさつで共通語になったのか不思議でなりません。

皆さんが使う機会は少ないと思いますが、対面リーディングで持ち込まれた図書の中で遭遇する機会はあります。

コピペ（コピー＆ペーストの略称）とか、キモい（気持ち悪い）、マジ（本当に・本気で）、ウザい（うっとうしい）、KY（空気を読め・空気を読めない奴）などは、市民権を得た感じがします。

食事の場面で「これやばい」と言われた時は、「まずい？」「腐っている？」とびっくりしたものですが、今では広く知れ渡ってきました。

ちなみに辞書を調べると『やばい』とは「危ない」「悪事がみつかりそう」「身の危険が迫っている」など不都合な状況を意味する形容詞（てきや）や感嘆詞として、江戸時代から盗人や的屋の間で使われた言葉です。その後、やばいは戦後のヤミ市などで一般にも広がり、同様の意味で使われています。1980年代に入ると若者の間で「怪しい」「格好悪い」といった意味でも使われるようになりますが、この段階ではまだ否定的な意味でしか使用されていません。これが1990年代に入ると「凄い」「のめり込みそうなくらい魅力的」といった肯定

的な意味でも使われるようになります。
　やばいはカタカナのヤバイやヤヴァイといった表記が使われることもあります。

　余談ですが外国でも同じような現象は起こっています。例えば中国では、ローマ字に置き換えて表現することが流行っているそうです。「MM は妹妹（メイメイ）で女子や彼女の意味、GG は哥哥（クークー）で男子や彼氏の意味で使われる」そうです。

　若者言葉は今に始まったことではありません。いつの時代でも『今の若い者は…』と嘆く人がいます。古くは清少納言の『枕草子』にも当時の若者の言葉の乱れに関する記述があります。
　先ほどの「ヤバイ」も元は盗人や的屋の商売用語、隠語でしたが、戦後のヤミ市などで一般にも広がり、今では私達も普通のように使っています。さらに若者が進化させ、新しい意味を追加したと言う事でしょうか。

　読み方は時代によって変化していますね。
　例えば『蛇足』は古くは「じゃそく」と読んでいました。教養の無い僕など「じゃそく」と読まれれば「間違っている」と思ってしまいます。
　それであれば、書かれた時代によって、読み方を変えなければならないのでしょうか？　それは難しいですね。

　『私』は「あし・あたい・あたくし・あたし・あっし・あて・し・ひそかに・わい・わし・わたい・わたくし・わたし・わちき・わっし・わっち・わて」と多数の読み方があります。その中でも「わたし」と「わたくし」が一般的に使われることが多いです。
　軍隊や、一昔前までは目上の人に向かって目下の人は「わたくし」と言う事が多いでしょうし、最近は「わたし」と読むことがほとんどです。読み方を違えると奇異な感じになりますね。これなどは時代、場面によって読み替えた方がいい例かも知れません。

　元は誤読だったが現在定着している漢字もたくさんあります。Web で検索すると数多くヒットします。面白いので列挙しました。

★誤用の方が定着したか優勢なもの。
・攪拌：こうはん→かくはん
・堪能：かんのう→たんのう
・端緒：たんしょ→たんちょ
・蛇足：じゃそく→だそく
・設立：せつりゅう→せつりつ
・睡眠：すいめん→すいみん
・出納：しゅつのう→すいとう
・情緒：じょうしょ→じょうちょ
・宿命：しゅくみょう→しゅくめい
・消耗：しょうこう→しょうもう
・漏洩：ろうせつ→ろうえい
・稟議：ひんぎ→りんぎ
・捏造：でつぞう→ねつぞう
・貪欲：たんよく→どんよく
・呂律：りょりつ→ろれつ

★変化の途中にあるもの。
・御用達：ごようたし→ごようたつ
・固執：こしゅう→こしつ
・早急：さっきゅう→そうきゅう
・重複：ちょうふく→じゅうふく
・荒らげる：あららげる→あらげる
・相殺：そうさい→そうさつ
・追従：ついしょう→ついじゅう
・茶道：ちゃどう→さどう
・悪名：あくみょう→あくめい
・残滓：ざんし→ざんさい
・貼付：ちょうふ→てんぷ
・口腔：こうこう→こうくう
・直截：ちょくさい→ちょくせつ
・逐電：ちくてん→ちくでん
・世論：よろん→せろん
・女人禁制：にょにんきんぜい→にょにんきんせい
・手を拱く：てをこまぬく→てをこまねく
・味気ない：あじきない→あじけない
・難しい：むつかしい→むずかしい

・白夜：はくや→びゃくや
　昔は「はくや」と読み，国語辞典にも見出し語として「びゃくや」はありませんでした。

森繁久弥や加藤登紀子の歌で有名になった『知床旅情』の頃から「びゃくや」の方が一般化してきました。今となっては「はくや」と人に言うのは正しいとはいえ度胸がいりますよね。

思い切って本来の読みをしたところで、漢字の読みも知らない人に対面をしてもらって大丈夫かなと思われるかも知れません。

長いものには巻かれろでしょうか！

同じように

・出生：しゅっしょう→しゅっせい

こちらも「しゅっせい」と読んでいたが、出生は出征と同じ発音なので、区別するため「しゅっしょう」と読むようになりました。しかし今や日本で出征は死語の如くなり、皆当然ながら出生を「しゅっせい」と読むようになったと聞きました。

しかし同じ「出生届」でも、役所に提出するのは「しゅっしょうとどけ」、病院や法律上では慣用読みに合わせて「しゅっせいとどけ」と読むことが多いなど、まだまだ混在している状況です。

さらに、読みだけではなく漢字も変わってしまったものがあります。

・丁字路（ていじろ）→Ｔ字路（てぃーじろ）

・一所懸命（いっしょけんめい）→一生懸命（いっしょうけんめい）

などです。

また、音位転換（おんいてんかん）で変わった言葉もあります。

「新しい」はもともとは「あらたしい」だったのに、なぜか「あたらしい」に変わり、そちらが市民権を得ました。

ところが、「新たに」という場合は「あらたに」のままで「あたらに」とはなりませんでした。

このような音位転換は「山茶花」の「さんざか」→「さざんか」や「しだらない」→「だらしない」などがあります。

「だらしない」という言葉は、近世語の「しだらない」が変化した語です。「しだら」とは、事のいきさつ、ひどい有様などの意味で、「ふしだら」という語に残っています。

「あたら（新）しい」も、奈良時代には「あらたし」であったのが、平安時代に「あたらし」になりました。

このように、一語中の音の位置が変わってしまう現象を「音位転換」または「音位転倒」といいます。

★音位転換の一例

さんざか（山茶花）→さざんか
手持ちぶさた→手持ちぶたさ
ちゃがま（茶釜）→ちゃまが
はらつづみ（腹鼓）→はらづつみ
おさわがせ→おさがわせ
あきばはら（秋葉原）→あきはばら

などがその例です。但し、誤読であったり、定着してないものも多く見られます。

ちなみに間違った読み方で定着した漢字ランキングは、以下の通りです。

■1位 輸入(ゆにゅう)→【正】しゅにゅう
■2位 捏造(ねつぞう)→【正】でつぞう
■3位 惨敗(ざんぱい)→【正】さんぱい
■4位 堪能(たんのう)→【正】かんのう
■5位 漏洩(ろうえい)→【正】ろうせつ

定着したとは言えないのですが、間違って読まれる頻度の高いものも紹介しましょう。

【貼付】これを「てんぷ」と読む人がいます。「ちょうふ」が正しく、貼り付ける意味です。「てんぷ」は「添付」で書類に他のものを添えつけることです。

「貼付」と「添付」は書類に関することでよく似ていますが、のりを使うかどうか、区別すべきです。

ところが広辞苑(第五版)は「貼付」の後に「添付」の項目を設け「チョウフの慣用読み」と説明しています。「てんぷ」と読むのは誤読ですが、辞書にも慣用読みとして載るほど定着してしまいました。

【悪役】これを「わるやく」と読む人がいます。「あくやく」が正しく「芝居での悪人の役」という意味です。「悪者（わるも

の)」と勘違いし誤読している人もいるかもしれません。「わるやく」に触れている辞書は見あたりませんでした。

【風体】これを「ふうたい」と読む人がいます。「ふうたい」が誤りと思っていたのですが、必ずしも間違いとは言えません。広辞苑(第五版)は「ふうてい」で「みなり」としたあとで「ふうたい」と付記しています。意味も「歌風」「世阿弥の芸術論」と３つありました。

そこで「ふうたい」を引くと「→ふうてい」とだけ書かれていました。新明解は「ふうたい」には一切触れていません。

【入水】これを「にゅうすい」と読む人がいます。「じゅすい」が正しく「水中に身を投げて自殺すること」とあります。

ところが、広辞苑(第五版)は「にゅうすい」を設け「水泳などで水に入ること」と「→じゅすい（入水)」を併記しています。

新明解は広辞苑の表記のほか「入ってくる水」も加えています。

漢字の読みのテストでは、両方を認めざるを得ないでしょう。

【裏面】これを「うらめん」と読む人がいます。「りめん」が正しく「うらがわ」という意味です。新明解、広辞苑ともに「うらめん」は認めていませんし、Word でも変換しません。その割に「うらめん」と読む人は多いですね。確かに「うらめん」でも話が通じますね。

話はそれますが、漢字の読みのテストをした時のことです。その中で素晴らしい解答を多く頂きました。あまりに素晴らしいので、ここで、ご紹介したいと思います。

「素面」の読みで解答が多かったのは「スッピン」でした。なるほどと思える読みですね。そのうちに、これが正しい読みになるかも知れません。

今のところ、正解は「しらふ（酒を飲んでいないときのこと。また、そのときの顔。)」、「すめ（酒を飲んでいないときのこと)」、「すめん（①能や剣道などで、面をつけないこと。②酒を飲んでいないときの顔。)」です。

最後に川端康成の『雪国』を紹介しましょう。冒頭の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という言葉は有名で、知らない人はおられないのではないかと思います。

ちょっと声に出して読んで下さい。『こっきょうの　ながいとんねるを…』。

日本国語大辞典（初版）の「こっきょう」の項に用例として「雪国」が掲載されていました。当然「こっきょう」と読みます。ところが、同辞典の第2版の「こっきょう」の項から「雪国」の用例が削除され、他の用例と入れ替えられました。

『声に出して読みたい日本語』（斉藤孝著・草思社刊）の初版に「雪国」がでています。「こっきょう」とルビが振ってありましたが、その後の34刷には「くにざかい」と変わっており議論になっています。

「こっきょう」は国と国の境目であって、日本国内で使う場合は「くにざかい」が正しいのではないか、という意見があります。

一方で、この小説の舞台となる場所である「上越国境」は「じょうえつこっきょう」と読むのが普通だ、という意見もあります。

当の川端康成はどう思っていたのでしょうか？「こっきょう」だったらしい、という意見はありますが、決定打はないようです。

興味深いのは、川端康成の弟さんが、「あの美意識の高い兄が、冒頭の一語に濁音を入れるわけがない」というのを書いておられます。なるほど、そういう見方をすると確かに「こっきょう」のほうが切れがいい感じですね。

対面リーディングの実際では迷う機会はほとんど無いと思いますが、言葉の由来や変遷を知った上で活動すると面白さも倍増すること間違いありません。

寄り道・回り道

レポーター：木村（きむら） 謹治（きんじ）

守破離（しゅはり） 堂島店 （蕎麦屋）

【所在地】　大阪市北区曽根崎新地2-1-9-101
【電話番号】　06-6442-0711
【行き方】　大阪市営四つ橋線西梅田駅 10 番口 徒歩８分
【営業時間】　11:30～15:30（L.O.14:30）　17:30～23:00（L.O.21:30）
【定休日】　年中無休（年始休業）
【URL】　http://shuhari.main.jp/

今回は時間が無くて夕方に訪ねました。店に入ると大きなカウンターが目に入ります。カウンターは一枚板の無垢材で落ち着いた雰囲気を醸し出しています。天井からのライティングで、ほのかに浮かび上がり、座っているだけで落ち着いてきます。

目を移すと、こちらもライトに照らされた苔の庭が眩しいです。庭に面したテーブル席は２組あり、運がよければこちらで食事が楽しめそうです。

何だか、別荘地のレストランに迷い込んだ感じがします。

昼間に訪れるとまた違った雰囲気でしょうね。

入口には２機の石臼挽きマシンが作動しています。

そうです、こちらは自家製粉、手打ち蕎麦のお店なんです。

何を食べようか迷いましたが「鴨つけ汁そば 1170円」を頼みました。蕎麦は太か細か選べます。つけ蕎麦なので太いのをお願いしました。

待ち時間は少し長めでしょうか。器いっぱいに入った鴨汁が先に出てきます。待ちきれず、口に含むと「おぉ～」と、思わず声に出すほどの美味しさ。大きめの鴨がゴロゴロ入り、焼いたネギの香ばしさと甘味がたまりません。出汁は甘味が少な目の辛口ですが旨味をしっかり感じます。

暫し待つと蕎麦が登場。薬味にネギと柚子胡椒が添えられています。蕎麦はコシがあるのですが硬すぎずちょうどいい塩梅です。こちらの店の趣向でいろんな食べ方ができるようで、つけ汁だけでなく、粗塩、七味、柚子胡椒でも楽しむことができます。つけ汁以外で美味しいと感じたのは、粗塩と柚子胡椒。

また、鴨に柚子胡椒を少し付けて食べても美味しいです。

160円追加すると大盛に、或いは150円追加すると十割そばに変更することができます。

食べた後で、もう少しと思った時は360円で2枚目のざるを注文することができます。

後から出て来た蕎麦湯も熱々で鴨汁と合わせて飲むと目が細くなるほど美味しかったです。次回は昼間に訪れたいですね。

尚、写真がうまく取れなかったので、店のホームページより拝借しました。

情報発信

「手引き」による誘導について（その２）

図書・情報係　福田（ふくた）　直樹（なおき）

今年の対面通信２月号で手引きについて簡単にご紹介しましたが、文章のみの説明でわかりづらい点があったかと思います。今回は手引きの基本について、写真付きで再度ご紹介します。

・手引きの基本姿勢（写真１、２）

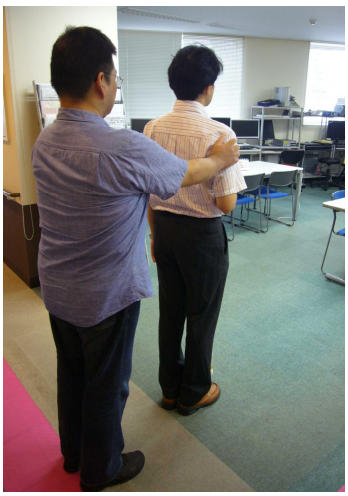
（写真１）

（写真２）

手引きする腕を自然に下げて、視覚障害者より必ず半歩前に立ち、ひじを軽く持ってもらうか、肩に触れてもらいます（写真１）。必要以上に緊張したり、腕に力を入れすぎたりしないで、軽く一緒に歩くという気持ちで、歩調を合わせて自然に歩いて下さい。

二人分の幅が確保できないときは、手引きをする人が手引きの腕を背中に回し、利用者は手引き者の真後ろにつきます（写真２）。動作だけでなく、「狭いので気をつけて下さい」等の声かけも大切です。狭い場所を通り過ぎたら腕を戻し、元の位置に戻ります。

・よくない例（写真３～６）



（写真３）

（写真４）

（写真５）

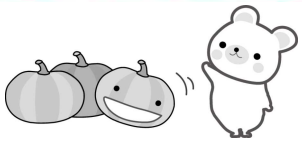
（写真６）

手引きする人が後ろから押したり（写真３）、視覚障害者の方のひじを持ったりすると（写真４）、体の自由がきかず、また視覚障害者の方が手引き者より前に立つため、前に何があるのか分からず、非常に不安感を持たせてしまいます。

白杖や腕を掴んでの誘導（写真５・６）は、体が斜めに引かれて方向が定まらず危険なだけでなく、本人の意思で移動することの手助けという、手引き本来の目的から外れることになりかねません。また、腕を組むなど必要以上に密着することも良くありませんね。

お互いにコミュニケーションを取りながら安全な誘導を心がけてください。

おしらせ



・「日本ライトハウス展　～全国ロービジョンフェア2016」を開催します。

毎年恒例、「日本ライトハウス展　～全国ロービジョンフェア2016」を10月15日（土）、16日（日）に開催します。会場は難波御堂筋ビル７階と８階で、時間は両日ともに10時～16時です。

今年のライトハウス展のステージには理化学研究所の高橋政代先生や、パラリンピック選手の和田伸也さんら、多彩なゲストが登場します。また、様々な機器や便利グッズをご覧いただける機会でもありますので、ぜひご来場ください。

・オープンデー、館内見学にご参加下さい

毎月1回、第2土曜日に開催している「オープンデー」は、どなたでもご参加いただける館内見学会です（10月は第４土曜日の22日に開催）。時間は13時30分から約２時間、普段はご覧頂けない製作部門などへもご案内します。費用は無料です。参加ご希望の方は対面担当までご予約をお願いします

盛り上がったリオ オリンピック・パラリンピックが閉幕しました。今回はパラリンピックの放送時間も長く、初めて見る競技や日本勢の活躍を堪能できました。次の東京大会も楽しみです。（F）

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6136-7704（対面専用）
06-6441-0039（サービス部）